

委員会・ワーキンググループ 議事概要（公開版）

大台ヶ原自然再生推進委員会

平成 28 年 2 月 23 日

森林生態系・ニホンジカ保護管理ワーキンググループ（第 1 回）

平成 27 年 8 月 12 日

生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第 1 回）

平成 27 年 9 月 29 日

生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第 2 回）

平成 27 年 12 月 2 日

平成 27 年度大台ヶ原自然再生推進委員会

議事概要

◆日時 平成 28 年 2 月 23 日 (火) 12:30 ～ 15:10

◆場所 ホテルリガーレ春日野 吉野の間

◆参加者

【委員長】

村上 興正 元京都大学理学研究科 講師

【委員】

井上 龍一 奈良教育大学附属小学校 教諭

川瀬 浩 (公財) 日本野鳥の会奈良支部 副支部長

木佐貫 博光 三重大学大学院生物資源学研究科 教授

高田 研一 高田森林緑地研究所 所長

高柳 敦 京都大学大学院農学研究科 講師

鳥居 春己 奈良教育大学自然環境教育センター 特任教授

松井 淳 奈良教育大学教育学部 教授

【オブザーバー】

近畿中国森林管理局

計画保全部 計画課 早瀬 善紀 企画官

保全課 古久保 順之 保護係長

箕面ふれあい推進センター 才本 隆司 所長

三重森林管理署 小畑 敏彦 地域林政調整官

奈良県農林部森林整備課鳥獣保護係 福富 竜弥 主事

三重県農林水産部獣害対策課 東川 恵美 主査

上北山村地域振興課 遠藤 学 主幹

川上村地域振興課 堀谷 敦 主事

近畿日本鉄道(株) 鉄道事業本部

大阪輸送統括部運輸部事業課 永田 圭示 課長

花本 美孝

(一財) 自然環境研究センター 千葉 かおり 主席研究員

安齊 友巳 主席研究員

荒木 良太 上席研究員

ソシオエンジニアリング(株) 西上 久遠 課長

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所

秀田 智彦	所長
榎本 和久	国立公園課長
遠藤 誠	野生生物課長
蒲池 紀之	自然再生企画官
川村 義治	生物多様性保全企画官
坂本 英利	自然環境整備課 課長補佐
鱸 雅哉	野生生物課 課長補佐
中山 良太	野生生物課 自然保護官
安生 浩太	国立公園課 係員
宮下 央章	野生生物課 係員
菅野 康祐	吉野自然保護官事務所 自然保護官
小川 遥	吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐
樋口 高志	環境部 マネジャー
山内 昌之	環境部 マネジャー
樋口 香代	環境部 リーダー
城向 光弥	環境部

(株) 環境総合テクノス

◆委員会の概要

大台ヶ原自然再生事業における平成 27 年度業務実施結果の報告および平成 28 年度業務実施計画を示し、今後の取り組みについて委員等に助言を頂いた。

➤ 委員会の議題

- ① 大台ヶ原自然再生事業における平成 27 年度業務実施結果
- ② 大台ヶ原自然再生事業における平成 28 年度業務実施計画（案）
- ③ 平成 28 年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）

➤ 委員会の概要

(1) 議事について

議題の概要及び委員等からの主な助言等は下記のとおり。

① 大台ヶ原自然再生事業における平成 27 年度業務実施結果

平成 27 年度の業務実施結果について報告し、助言を求めた。

【森林生態系の保全・再生】

- 正木峠の稚樹保護柵について、柵内のミヤコザサが繁茂することから稚樹がササに覆われることへの対処が必要となる。稚樹保護柵の評価をするのであれば柵内外も含めたササの稈高の計測も必要ではないか。
- ササ地では坪刈りをしていないところで、トウヒの主軸が伸びることが各地で確認されているが、ササの稈高以上に主軸が伸びたものはニホンジカに採食されやすい。ササの坪刈りについては、今後の検討課題である。
- 稚樹保護柵の維持管理について、どのように進めるかを考えないといけない。

【ニホンジカ個体群の保護管理】

- REM 法（ランダムエンカウンターモデル：個体識別を必要としない自動撮影を用いた生息密度推定方法）によるニホンジカの生息密度は、6～8 月に生息密度が最も高くなることがわかった。従来、糞粒法により推定している個体数密度は 10 月のものであるため、6～8 月よりも低い。個体数管理については生息密度が最高値となる 8 月を基準に考えないといけない。
- 自動撮影カメラを用いた生息密度調査結果は、成獣メスを対象として再度分析する必要がある。
- 捕獲個体のモニタリング調査結果の成獣メスの妊娠率の推移について、統計学的な有意差はなかったものの、近年低下傾向を示しており、平成 27 年の値は突出して低かった。妊娠率と栄養状態の二つの指標動向が一致しているため、今後の動向、特に平成 28 年度については注視する必要がある。
- 植生調査地点において、イノシシの撮影頻度がニホンジカより高いコドラートが存在した。イノシシによる植生への影響は大きいことが予想されるため、植生への影響程度と対策の必要性を今後検討する必要がある。

【生物多様性の保全・再生】

- 訪花昆虫について、種同定はできないが、夜間についてもインターバルカメラで訪花昆虫を確認することができる。昼間の調査と合わせて実施することを検討したらどうか。
- 大台ヶ原でミズラモグラの生息が確認されているのか確認して欲しい。生息しているのであれば、生物多様性の健全性を示すことができると思う。

【持続可能な利用の推進】

- 次世代を担う小中学生が大台ヶ原に行きたくなるようなガイドについても考えないといけない。
- 次世代を育てるための普及啓発活動として、小中学校でも研修会を実施したらどうか。
- 登録ガイドを利用する場合、西大台利用調整地区の事前レクチャーが不要になるなど、インセンティブが必要。
- ガイド登録せずにガイド活動する人の対応についての検討も必要。
- アクティブレンジャーの自然観察会の回数が1回では少ない。地元のボランティアやビジターセンター職員を活用する等して、土日だけ、小規模でも良いので常時自然観察会を行えるようにすべきである。

【大台ヶ原全体の変化に関する調査】

- 水質について、1983年に大台ヶ原の水生昆虫相のデータがあるので、直接的ではないが生物学的な比較はできる。水生生物相を比較するのは1つやり方であるので、実施方法を含めて今後検討するとよい。

② 大台ヶ原自然再生事業における平成28年度業務実施計画（案）

平成28年度の業務実施計画（案）について報告し、助言を求めた。

【森林生態系の保全・再生】

- 稚樹保護柵について、維持管理を含めた評価が必要。

【ニホンジカ個体群の保護管理】

- 大台ヶ原ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画（第4期）を策定するにあたり、大台ヶ原ニホンジカ特定鳥獣保護管理計画（第3期）についての実施状況の見直しだけでなく、評価が必要となる。
- ニホンジカの目標生息密度をどのぐらいにするのが課題。現状では、根拠となるものがなく、決め手がない。今年度から実施している防鹿柵内外の植生の回復状況の比較等から健全な森林更新ができる状態がどのくらいかを検討する必要がある。
- ニホンジカによる植生被害が日本全国で生じている。生息密度を5頭/km²近くまで減少させた数少ない事例である大台ヶ原からの情報発信が足りないのではないかと。植生が回復しているか否かについての情報も発信すべきであり、それを判断するために、植生データをさらに追加していくべき。大台ヶ原ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画（第4期）を策定するにあたって、全国に大台ヶ原の成果を意識的に情報発信するべきである。
- ニホンジカについては、土地の選好性がある。また、植物については、回復が容易な種、難しい種の整理が必要で、共有できるデータを蓄積する必要がある。その上で、適正生息密度の検

討を行う必要がある。大台ヶ原ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画（第4期）は大まかな計画とし、具体的な取り組みについては、上記検討等を踏まえ、1年程度毎に策定する実施計画に記載して進めて行くのが望ましいだろう。

- 環境省と林野庁で情報交換を行い、捕獲したニホンジカの運搬など、協力体制をとれるようにする必要がある。

【大台ヶ原全体の変化に関する調査】

- 水質調査に関連して土砂の流亡について調査を実施する必要があるのではないかと検討が必要。

③ 平成28年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）

平成28年度に実施する大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定案について報告し、助言を求めた。

- 持続可能な利用（ワイズユース）ワーキンググループについては、利用者が多い7、8月に携帯トイレの実験ができるようにもう少し早めた方がよい。
- 6月ぐらいの早い時期に、計画を検討するワーキンググループがあるとよい。
- 業務の実施計画の表に具体的な実施時期を書き込んだ方が検討しやすい。

④ その他

- 会議資料について、事前配付したものに微細な修正を加えて会議当日に配付する場合は、資料全てを再配付するのではなく、事前に配付したものの修正分のみを配付するようにして、紙が無駄にならないようにしてほしい。また、資料そのものの量も減らすことを検討してほしい。

以上

平成 27 年度大台ヶ原自然再生推進委員会
森林生態系・ニホンジカ保護管理ワーキンググループ（現地WG）
議事概要

◆日時 平成 27 年 8 月 12 日（水） 14:00 ～ 16:00

◆場所 大台ヶ原 ビジターセンター

◆参加者

【委員】

井上 龍一	奈良教育大学附属小学校 教諭
川瀬 浩	（公財）日本野鳥の会奈良支部 副支部長
佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館 主任学芸員
高田 研一	高田森林緑地研究所 所長
高橋 裕史	（独）森林総合研究所関西支所 生物多様性研究グループ 主任研究員
日野 輝明	名城大学農学部 教授
日比 伸子	橿原市昆虫館 統括調整員
松井 淳	奈良教育大学教育学部 教授
村上 興正	元京都大学理学研究科 講師
横田 岳人	龍谷大学 准教授

【オブザーバー】

（一財）自然環境研究センター	千葉 かおり	主席研究員
	荒木 良太	上席研究員
	中田 靖彦	研究員

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所	秀田 智彦	所長
	遠藤 誠	野生生物課長
	川村 義治	生物多様性保全企画官
	坂本 英利	自然環境整備課 課長補佐
	鑪 雅哉	野生生物課 課長補佐
	中山 良太	野生生物課 自然保護官
	宮下 央章	野生生物課 係員
	菅野 康祐	吉野自然保護官事務所 自然保護官
	小川 遙	吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐
	（株）環境総合テクノス	山内 昌之
樋口 香代		環境部 リーダー
城向 光弥		環境部

◆議事

- (1) ニホンジカ搬出処理方法について
- (2) 苗畑のトウヒ苗木、配水池のトウヒ等自生稚樹の利用について
- (3) 今年度調査について
 - ・コマドリ調査について
 - ・訪花昆虫調査について
- (4) 今年度追加で実施すべき調査項目について
- (5) 西大台歩道沿いにおける希少種盗採抑制のための自動撮影カメラの設置について

◆議事概要

- (1) 森林生態系・ニホンジカ保護管理ワーキンググループの座長選出について

- 松井委員を互選により森林生態系・ニホンジカ保護管理ワーキンググループの座長とした。

- (2) 議事について

ニホンジカ搬出処理方法について

- 搬出については、基本は既設道路を利用し、一輪車とテラーを使い分ける。ササ地についてはソリの利用も検討する。
- 埋設試験に伴うクマの出現については試験期間中にクマが出現しなかったから大丈夫だと判断することはできない。モニタリングを継続することが必要である。
- ニホンジカの処理の方法について、県や猟友会と連携するなど、広域連携の検討が必要である。
- ニホンジカの季節移動のパターンや生息密度、出現頻度等を解析してニホンジカが居る場所で捕獲する。捕獲場所ごとに最適な搬出方法を検討してはどうか。

苗畑のトウヒ苗木、配水池のトウヒ等自生稚樹の利用について

- 苗畑の苗は今後、事業としては植栽をしないが、比較的樹高の低い植栽可能な苗木については、ボランティアとしての活用は検討する。
- 苗畑をどのような状態にして返却すればよいのか、奈良県との調整が必要である。
- 配水池のトウヒについては伐採する必要があるもの、植栽などに利用できるもの、そのままにしておいてよいもの等、仕分けをするための現況調査が必要である。
- 配水池のトウヒ稚樹についても、今後どのような状態にしていくのか県と調整が必要である。

- (3)今年度調査について

【コマドリ調査について】

- 全体としてコマドリは増えてきているようである。

【訪花昆虫調査について】

- 5月調査ではエンゴサク、コミヤマカタバミなどに訪花昆虫が見られた。8月調査ではヒ

ナノウスツボ、テバコモミジガサ、ニシノヤマタイミンガサに多くの訪花昆虫が見られた。

(4)今年度追加で実施すべき調査項目について

- 単年度ごとに調査内容を検討するのではなく、全体計画を立てる必要がある。
- 全体計画を立てるためのデータ整理とブレインストーミング的な会議が必要である。

(5)西大台歩道沿いにおける希少種盗採抑制のための自動撮影カメラの設置について

- 防犯を目的とするのであれば、「防犯カメラ設置中」の看板が必要である。
- ドライブウェイからの七ツ池の出入り口になっている箇所にも自動撮影カメラを設置した方がよい。

(6)その他

【No.22 防鹿柵について】

- 防鹿柵の点検については、見る目を増やす必要がある。
- 点検業務の請負者だけでなく、調査や入山者等が防鹿柵の破損を見つけた場合に、ビジターセンターへ連絡できるようにしておく。

以上

平成 27 年度大台ヶ原自然再生推進委員会
生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第 1 回）結果概要

1. 日時 平成 27 年 9 月 29 日（火） 14:00 ～ 16:30

2. 場所 環境省近畿地方環境事務所 会議室

3. 参加者

【委員】

川瀬 浩 (公財) 日本野鳥の会奈良支部 副支部長

松井 淳 奈良教育大学教育学部 教授

村上 興正 元京都大学理学研究科 講師

【ワーキンググループ委員】

丑丸 敦史 神戸大学発達科学部 教授

【オブザーバー】

(一財) 自然環境研究センター 千葉 かおり 主席研究員

安齊 友巳 主席研究員

橋本 琢磨 上席研究員

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所 榎本 和久 国立公園課長

遠藤 誠 野生生物課長

川村 義治 生物多様性保全企画官

坂本 英利 自然環境整備課 課長補佐

鑪 雅哉 野生生物課 課長補佐

中山 良太 野生生物課 自然保護官

宮下 央章 野生生物課 係員

菅野 康祐 吉野自然保護官事務所 自然保護官

小川 遥 吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐

(株) 環境総合テクノス 樋口 高志 環境部 マネジャー

樋口 香代 環境部 リーダー

4. 議事

(1) コマドリースズタケ調査について

(2) 訪花昆虫調査結果について（速報）

(3) 樹上性小型哺乳類調査について（中間報告）

5. 概要：

平成 27 年度に実施した下記の 3 つの調査について、中間報告も含め、調査結果を委員等に報告し、今後の調査手法、解析方法について委員等に助言を頂いた。

(1) コマドリースズタケ調査

自然再生の状況をモニタリングするため、回復しつつあるスズタケの生育状況と、スズタケを含む植生を生息適地とするコマドリの生息状況との関係を把握する調査

(2) 訪花昆虫調査

生物多様性の回復を把握するための指標として、開花植物と訪花昆虫の相互関係に着目した調査の方法を検討するための予備調査

(3) 樹上性小型哺乳類調査

森林生態系の回復状況を把握するため、森林に対する依存性が強い樹上性小型哺乳類(ヤマネ)を対象として行う生息状況調査

委員等からの助言、意見の概要は以下のとおり。

○生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループの座長選出について

- 村上委員を互選により生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループの座長とした。

○コマドリ・スズタケ調査について

- 今回スズタケの状況写真を撮影した場所は、次回調査時に再現できるようにマーキングをした方がよい。次回調査時には、全体の傾向としてスズタケがどのくらい回復したのかを比較することができる。
- ミヤコザサが繁茂している箇所においてもコマドリが確認されたのは、大台ヶ原にスズタケが少なくなり、コマドリがそのような環境に適応して、ミヤコザサが繁茂している場所でも繁殖できるようになったからではないかと考えている。
- ササの被度、高さについて、コマドリの利用との関連を見るために、どのスケールで捕らえればよいのか、先行研究があると思うので、それを参考にして調査をしたほうがよい。
- スズタケが回復した結果、年ごとにペア数が増えるのを把握していけばよいと考えている。1年間での調査頻度を増やしても、その年のペアの数は決まっているので意味はない。同じ手法で次回調査をして、比較すれば結果がでるだろう。
- 今回はコマドリ確認数が少なく、今後もこの程度しか確認されないなら、解析するために必要なデータ数を集めるにはかなりの年数がかかるが、今後はコマドリの個体数が増えると予想されるので、確認数が増え、解析できる時期が早まることもあり得るだろう。
- ゼロデータが多く、少しだけデータがあるところでなかなか傾向はつかめない性質のものだと思う。信頼できる関係者が見たデータについても集約しておいたほうがよい。
- 柵内でスズタケが回復した場所で、コマドリの調査をするのも一つの方法だと思う。

○訪花昆虫調査について

- 訪花昆虫が出現するピークは8～9月と早春の2回ある。トラマルハナバチ等も確認されており、大台ヶ原の送粉者はそれなりに維持されている。訪花性昆虫は柵内と柵外の植生を連携して利用しているものと思う。
- 樹木の花が終わった時期である8月には、柵外には花がないため、柵内の花を利用していると思う。

- 9月には、ドライブウェイ沿いにアザミが多く咲いている。アザミはいろいろな昆虫が利用するので、送粉者の維持に役立っていると思う。
- 植物と昆虫のネットワーク図はデータがあれば作成することはできる。ただし、柵内と柵外を同じ努力量で調査を実施する必要がある、樹木の花も調査をしないといけないので、労力はかかる。簡単にはできない。
- 出現した訪花性昆虫の種類とその性質はわかるので、他の地域の研究と比較してもよい。
- 大学の研究では、花のパッチ（同一種の花の塊）の数を計測し、量の調査をしているが、捕獲よりも労力がかなりかかるので、今回のような被度で花の量を評価する調査手法でよいと思う。道路脇（林縁部）の役割も重要であると思う。林内の柵内と柵外および道路脇（林縁部）の3つの環境について、作業面積を一定にして、定量化した調査を実施するのも一つの方法だと思う。また、花のパッチ（同一種の花の塊）があったら、10分間採集する等で作業量を同じする方法もある。
- 目の高さぐらいまでの低木のツツジ類やリョウブ等についても調査対象にするのが望ましい。
- 柵内、柵外で共通して花が咲いている種は、比較のために調査しておいたほうがよい。
- 数年調査をするのがベターだが、1年間でも、必要な調査を集中してすればわかることが多くてよい。中途半端に調査をしてもいいことはないと考えべきである。どうしても1年間で必要な調査が全部できないのであれば、次善の策として、数年間に分けて調査をし、1年ごとに調査をする季節を決めて、たとえば、春に2回、夏に2回、秋に2回といったように3年間ですべての季節が網羅できるようにする方法も考えられる。ただし、年変動があるので、複数年に分けて行うのはベストとは言えないが。
- 大台は標高が高いので調査期間も短いと思う。5月～9月が調査期間となる。5月の個体数が少ないのであれば、6月に個体数が増えてからやっても良い。

○樹上性小型哺乳類調査について（中間報告）

- 今年、初めてヤマネが見つかった場所について、何らかの植生に関する要因の変化がヤマネの生息確認に関与している可能性がある。
- 巣箱がのべ90個あるので、単年度だけでも巣箱ごとのヤマネの出現の有無と、柵内外、下層植生の高さや被度、植生タイプ等を用いて出現確率を統計解析してみるのはいかがでしょうか。次回の調査の時の解析のために調査しておいたほうがよい。

以上

（文責：近畿地方環境事務所野生生物課 速報のため事後修正の可能性あり）

平成 27 年度大台ヶ原自然再生推進委員会
生物多様性（種多様性・相互関係）ワーキンググループ（第 2 回）
議事概要

◆日時 平成 27 年 12 月 2 日（水） 14:00 ～ 16:30

◆場所 環境省近畿地方環境事務所 大会議室

◆参加者

【委員】

川瀬 浩	（公財）日本野鳥の会奈良支部	副支部長
野間 直彦	滋賀県立大学環境科学部	准教授
日比 伸子	橿原市昆虫館	統括調整員
松井 淳	奈良教育大学教育学部	教授
村上 興正	元京都大学理学研究科	講師
横田 岳人	龍谷大学理工学部	准教授

【オブザーバー】

（一財）自然環境研究センター	千葉 かおり	主席研究員
	橋本 琢磨	上席研究員
	石塚 新	上席研究員

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所	榎本 和久	国立公園課長
	遠藤 誠	野生生物課長
	川村 義治	生物多様性保全企画官
	坂本 英利	自然環境整備課 課長補佐
	鑪 雅哉	野生生物課 課長補佐
	中山 良太	野生生物課 自然保護官
	宮下 央章	野生生物課 係員
	菅野 康祐	吉野自然保護官事務所 自然保護官
	小川 遥	吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐
	（株）環境総合テクノス	樋口 高志
樋口 香代		環境部 リーダー
植田 義輔		環境部 リーダー

◆ワーキンググループの概要

平成 27 年度に実施した下記の 3 つの議事について、中間報告も含め、調査結果を委員等に報告し、今後の調査手法、解析方法について委員等に助言を頂いた。

➤ ワーキンググループの議事

- ① 訪花昆虫調査結果について（中間報告）
- ② ハバチ類調査について
- ③ 樹上性小型哺乳類調査について
- ④ その他

➤ ワーキンググループの概要

(1) 議事について

議題の概要及び委員等からの主な助言等は下記のとおり。

① 訪花昆虫調査結果について（中間報告）

開花植物と訪花昆虫の相互関係に着目した調査の方法を検討するための予備調査結果（中間報告）を示し、次年度以降の調査手法、解析手法について助言を求めた。

- 今回実施した予備調査では訪花昆虫として出るべきものが出ているのか、調査結果や手法を評価し、今後の調査手法をどのように改良していくのかといった議論が必要である。
- 今後は開花植物の種類にこだわらず定量的な手法で実施した方がよい。
- 開花植物のパッチのイメージを明確にする必要がある。また、開花植物の量のおさえ方については予備調査で実施したような 3 段階（多い、やや多い、少ない）ではなく、花の数の桁レベルくらいまでの把握はした方がよい。
- 訪花昆虫の群集を見るのであれば花の種にこだわらない手法で良いが、どの開花植物に訪花していたのかといった個々の関係は見ておく必要がある。
- 昆虫群集として個体数を見るだけではなく種の特長についても見ておいた方がよい。8～9 月に実施した今回の予備調査で確認されたチョウ類は移動性が高いものばかりだが、季節を通じて実施すれば多食性の種、狭食性の種、大台ヶ原に特徴的な種が出るのではないか。
- 定量的な調査手法や開花植物のパッチの構造の考え方など、専門分野の委員にヒアリングを実施して今後の調査手法について詰める必要がある。

② ハバチ類調査について

生物多様性の回復を把握するための指標として、ハバチ類と食草となる植物との相互関係に着目した調査の方法を検討するにあたって神戸大学 内藤親彦名誉教授にヒアリングを実施した結果を報告し、今後のハバチ類調査の実施について助言を求めた。

- これまでに大台ヶ原で採集されたハバチ類全 68 種のうち、少なくとも約 1 割の 7 種くらいが遺存分布など大台ヶ原に特徴的な種である。
- 訪花昆虫に比べるとハバチ類は移動性が低いので、大台ヶ原らしい種多様性について出しやすいが、定量的な調査は難しい。

- 過去調査（1971年、1985年）は全国的な調査の1地点としての位置づけで実施したものであり、データが不十分であることから、新たな調査を実施して過去との比較をする必要はない。
- ハバチ類の調査は行わないにしても、大台ヶ原自然再生事業の一環として実施した2006年～2010年のハバチ類調査の結果を、植物との関係性もふまえてとりまとめ、自然再生事業の評価を行う。

③ 樹上性小型哺乳類調査について

森林に対する依存性が強い樹上性小型哺乳類(ヤマネ)を対象として行う生息状況調査について調査結果を示し、解析手法や分析等について助言を求めた。

- 全体的な傾向としてヤマネの密度が顕著に増加しているとは言えないが、今回の調査でヤマト谷ルートで新たにヤマネが確認されたことから、分布拡大の可能性が認められたことは言える。
- 現在までの調査では、ヤマネの生息と植生との関係については不明である。
- ヤヤマネの調査として、これだけ詳細に、また、継続的に調査している例は全国的に見ても珍しい。ヤマネは安定した個体群を維持していることは言え、今後も調査を継続する意義はある。

④ その他

第1回ワーキンググループで報告した「コマドリースズタケ調査結果」について、植生メッシュにずれがあったことが判明した。このため植生メッシュを修正して、再度図版等を作成した。また、ワーキンググループ終了後、追加的にササ類の調査を2地点で実施したことから、これらのデータも追加して更新した。これらの修正事項について報告した。

- 次回調査は2年後の予定だが、コマドリの生息情報を蓄積し、コマドリの生息個体数が増えてきたときに実施する。

以上